

プロジェクト研究B 1

ヒューマンアラシー研究会（研究代表者：文学部教授 八木 保樹）

（研究会活動のまとめ）

初年度に「研究目的」の項に要約したように、各グループごとの成果を「基準」と「ヒューマン・アラシー」の概念のもとに統括したグランドセオリーを構築することを念頭に、初年度以来、以下に述べる各グループごとの活動を完成に向けて行った。

認知・ヒューマンインターフェースの研究領域：

アイコン設計におけるデザイン等の誤り事例を収し、それらの分析結果を用いて視点の違いや基準の違いによって如何に異なった解釈が行われるかを、実的に明らかにし、その改善策についても検討し、ヒューマンインタフェース上のガイドラインとして取りまとめる。第二に、「推論パフォーマンス」の成果を、QODSモデルの枠組みを大幅に進展させ、具体的問題を扱えるものに拡張する。これを成功させた後、双条件仮説と稀少性仮説自体の適応的合理性について、言語概念構造の観点から検討する。これには、確率的言語モデルにヒントを求めながら、シミュレーションによって、仮説の妥当性をみる。

感覚・知覚の研究領域：

視角にして40度以上の巨大な刺激図形を呈示して、ベクシオン(観察者の体のふらつき)を測定する。ベクシオンは主観法(口頭で内観を答えること)と客観法(身体の重心の動の測定)の2種類で測定する。刺激図形はB0プリンタでB0の大きさで作り、渦巻き錯視図形、動く錯視図形、および渦巻き錯視図形でありながら動く錯視図形の3種類とする。それぞれ知覚レベルの、白視量とベクシオンの大きさを測定し、比較する。

学習・思考の研究領域：

小学校の教科の学習で用いられる概念を題材にして、既述の理論を検討する。具体的には、小学生を対象に、分数と割合、書きにおいて一斉テストを行い、どのような誤りがあるかを検出し、それらの誤りの背後にある一貫したルールを検討する。次に、それらの誤った方略を示した子どもを対象にして、その方略に対する子どもの意識を分析する。彼らはそれらの方略を自らは正しいものと思っているのかどうかを自信の程度などを指標にして検討する。

人格・社会の研究領域：

第一に、認知的不協和のいくつかのパラダイム、たとえば「決定後の偏愛パラダイムにおいて、被験者の自我関与の有無、自尊心の高低、各自の自尊心を意識するか否か、選択商品のフィードバックの有無、という変数を組織的に操作する。第二に、家族間の共感と愛他心という関から、祖父母と孫の関係、とくに対立状態にある関係について、アラシーをもたらず要因として、それぞれの求めるもの・もとめられるものの違い、それがどのような価値基準にもとづいているのかを取り、げ、対立葛藤を解消し、共感愛他に向かうトレーニングマニュアルを作成する。

（今後の活動の見通し）

本プロジェクト研究の研究期間は2004年度が最終年度となるが、同一課題で採択中の科学研究補助金基盤研究B(研究代表者：松田隆夫)による研究期間が2005年度まで継続するため、最終的な報告書は2006年3月を期限に作成することになっている。

各研究分担者は、前年度までと同様、それぞれの担当領域に関する研究成果を学会等で逐次発表するとともに、学術論文として公刊していく予定であり、現在、数件の論文は投稿を終えて審査中である。さらに、発表申し込み済みの成果も多数あることを付言しておく。

今年度の研究成果の公表状況

<ヒューマンアラシー研究会>

論文：

Oda, M. and Isono, K. (2003) Impression of facial expressions with asynchronous movement of facial parts. 26th ECVF. PERCEPTION, 32, Supplement, 174.

北岡明佳 (2003) 動く錯視の分類 電機通信大学大学院・IS シンポジウム - Seeing and

Perception. 10, 67-71.

Kitaoka,A. and Ashida,H. (2003) Phenomenal characteristics of the peripheral drift illusion. VISION, 15, 261-262.

Kitaoka,A. (2003) The frame of reference in anomalous motion illusions and ergonomics of human fallacy. Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 6, 77-80.

北岡明佳 (2002) 錯視のウェアネスとクオリアを考える 基礎心理学研究, 21, 69-73.

星野祐司 (2003) 再認記憶におけるファン効果の概念依存性：干渉とメンタルモデル 立命館人間科学研究, 5, 155-169

星野祐司 (2002) 関連語の学習による誤再生とリスト構成：ブロック提示条件とランダム提示条件の比較 基礎心理学研究, 20 105-114.

松田隆夫 (2003) 知覚判断における「基準」の多様性とヒューマンファラシーの諸相 立命館人間科学研究, 6, 67-76

大中悠紀子・竹澤智美 (2002) 画像上の人物に対する絶対距離と相対距離の知覚 立命館人間科学研究, 4, 9-18

Yoshida,H. and Kawano,Y. (2003) "Logic of children" and "logic of subject matters" : Effect of an instructional intervention on understanding ratio concepts based upon children's informal knowledge. Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 5, 145-154.

吉田甫 (2002) 関係推理と量的推理・割合概念の場合 立命館人間科学研究, 4, 1-8.

吉田甫・大川一郎・土田宣明 (1992) 痴呆を伴う高齢者に対する認知リハビリテーション研究の展望 立命館大学人間科学研究, 4, 77-98

森友紀・八木保樹 (2003) あいづちを用いた聞き手による偽装 立命館人間科学研究, 6, 43-54

学会発表等における口頭発表：

北岡明佳：6件	尾田政臣：3件
松田隆夫：7件	星野祐司：1件
八木保樹：1件	